

キリシタン版の連綿活字について

白 井 純

(信州大学人文学部)

Hiragana Ligatures of the Jesuit Mission Press in Japan

SHIRAI, Jun

Shinshu University Faculty of Arts

The Jesuit Mission Press in Japan produced documents relating to the missionary work performed by the Society of Jesus in Japan from the 16th to the early 17th century. Some of these documents contain Chinese and Japanese characters, using Japanese *hiragana* variants and uninterrupted writing. Scholars assume that these documents reproduced the appearance of original manuscripts by using *hiragana* typography and ligatures.

In principle, these ligatures were used for high-frequency character strings; however, there were some exceptions. For instance, metal type production efficiency, ligature substitute for Chinese characters. In particular, ligatures in these documents contribute to the punctuation of words. This linguistic function is derived from paying attention to the particle position.

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1. はじめに | 3.2. 「ん」で終わる文字列 |
| 2. 連綿活字の使用環境 | 4. 連綿活字と活字使用 |
| 2.1. 後期国字本の連綿活字 | 4.1. 助詞にかかる連綿 |
| 2.2. 連綿活字の使用率 | 4.2. 分かち書き |
| 2.3. 連綿活字が使用される文字列 | 5. まとめ |
| 3. 連綿活字と活字製作 | 参考文献 |
| 3.1. 清濁の仮名 | |

Keywords: Jesuit Mission Press, type, ligature, uninterrupted writing, punctuation of words

キーワード: キリシタン版, 活字, 連綿活字, 連綿, 語の区切り

* 本稿執筆に際して、キリシタン版の連綿活字（連鑄活字・連影活字）について、森上修氏より書状にてご案内を頂戴し、最新の調査データの提示を含め懇切なお言葉をいただいた。近く成果が発表されるとのことで、同一の文字列に対応する複数の連綿活字種の区別など、本稿で扱えなかった問題についても明らかにしていただけないかと期待している。また、本稿は、北海道大学国語国文学会平成十九年度春季大会（平成19年7月14日於北海道大学）およびAA研共同研究プロジェクト「宣教に伴う言語学」研究会（平成19年8月14日於国際基督教大学）における研究発表の内容を増補したものである。貴重なご指導・ご意見を賜った方々に感謝申し上げます。

1. はじめに

キリシタン版は、16世紀末から17世紀初にかけて日本で布教活動を行ったキリスト教イエズス会の宣教師たちが中心となって出版した文献である。そのなかで後期国字本とよばれる文献は、漢字かな交じりの本文を金属活字で印刷し、変体仮名や連綿の使用により書写本の体裁を再現したものとされている。日本の嵯峨本はキリシタン版とほぼ同時期の出版であり、その内容については検討を要するものの、連綿活字を用いた点では共通しており注目される。

キリシタン版後期国字本の連綿活字については新井トシ(1957-59)、天理大学図書館(1973)に使用状況が詳しく示され、『おらしよの翻訳』については中根勝(1999)の調査がある。また、嵯峨本『伊勢物語』については鈴木広光(2006)に詳しい。いずれも、連綿活字を含む活字印影の悉皆調査として非常に精細なもので、鈴木(2006)には「同一文字列に対応する複数の連彫活字の存在は、版面の単調さを回避するために効率性を度外視して使用されたもの」という内容の指摘がある。

また、連綿活字の言語表現上の効果に踏み込んだものとして、豊島正之(2001)に『ぎやどべかどる』の連綿は自立語の開始位置を跨がない「仮名連綿活字の使用による可読性の向上」という内容の重要な指摘がある。通常の連綿表記にこうした特徴はなく、嵯峨本もこの点では同様だからである。

以下には、キリシタン版後期国字本の連綿活字について、どの文字列を対象として連綿活字を製作し、使用するのかについて調査した結果を示す。連綿活字はおおむね頻度の高い文字列に使用されているが、清濁関係による活字製作の効率性や、漢字の仮名表記に使用し易い連綿活字の優先などの方針が使用回数の多寡に優先することがあり、連綿活字の使用開始時期によっても使用頻度に相違がみられる。また、助詞にかかる位置に使用された連綿活字には、とくに初期においては語の区切りという言語表現上の効果への配慮がみられるが、その効果は活字製作時の対象文字列選定に由来しており、活字使用時の判断によるものではないことを指摘したい。

2. 連綿活字の使用環境

2.1. 後期国字本の連綿活字

キリシタン版国字本は極初期片仮名本、大型活字本(以下「前期国字本」)、小型活字本(以下「後期国字本」)に分かれ、前期国字本では極めて限定的だった連綿活字¹⁾を、後期国字本では300種を超えて積極的に採用していることに特徴がある。表1に示す「連綿活字対応文字列種」は、連綿活字が存在する文字列の異なり数(連綿活字で組版可能な文字列の種類のこと、踊り字の連続は除外)を指し、連綿活字種そのものの異なり数ではない。中根(1999)に示されるように、同一の文字列に対応する二種類以上の連綿活字種がみられることもあるが、活字種の区別そのものが本稿の目的ではないため考慮していない。

1) 連綿活字は、連綿表記を1つの活字として実現したもの。連綿しない2文字以上が1つの活字で実現された例があることは鈴木(2006)による嵯峨本の調査でも実証されている(そのため「連綿活字」「連続活字」という呼称を避けて「連彫活字」と呼んでいる)。キリシタン版後期国字本については使用された金属活字の特徴により判別が難しいため、確実に筆画が連続するものだけを対象とし、例外的に2文字目の上端が1文字目の下端より上に位置する連綿活字「わが」を含めた。その意味で、本稿では「連綿活字」としている。

表1. キリシタン版後期国字本（前半）

	刊行	連綿活字対応文字列種	使用開始連綿活字種
さるばとるむんち	1598	167	167
ぎやどべかどる	1599	261	105
おらしよの翻訳	1600	201	19
どちりなきりしたん	1600	265	18

本稿は、後期国字本の前半にあたる『さるばとるむんち』『ぎやどべかどる』『おらしよの翻訳』『どちりなきりしたん』を対象に、連綿活字の製作と使用について調査した²⁾。詳細は表2として掲載したが、煩雑であるため、ここから注目する点を抽出して検討したい。なお、調査にあたっては可能な限り正確を期したが、汚損や擦れの状況から、一部推定が含まれることをあらかじめお断りしておく³⁾。

2.2. 連綿活字の使用率

連綿活字は、たとえ製作されていても、それを使用することが可能な文字列すべてに用いられているわけではないが、初期の文献ほど使用率が高い。表3は、連綿活字が製作されており、連綿・非連綿が交換可能となる環境において、それぞれの文献でどちらを選択したのかを表2をもとにまとめたものである⁴⁾。

連綿活字の使用率は徐々に低下しており、『さるばとるむんち』では95.5%、『ぎやどべかどる』では90.3%、『おらしよの翻訳』では85.3%、『どちりなきりしたん』では83.6%となる⁵⁾。そして、この使用率の低下は各連綿活字の使用開始時期と関係する。

表1に示したように、『さるばとるむんち』に続く文献では連綿活字の種類が増えており、そのなかには『さるばとるむんち』に対応する文字列はあるが連綿活字の使用がみられないものが少なくない。これらの文字列に対しては、『さるばとるむんち』の印刷時には連綿活字が製作されていないか、製作されたが使用されず、後続の文献で使用が開始されたことになる。したがって、後期国字本の連綿活字には「初めから使用する連綿活字」「追加して使用する連綿活字」があり、これらを区別しておく必要がある（表4）。

『さるばとるむんち』から使用される連綿活字がすべての文献で95%前後の高い使用率を維持しているのに対し、『ぎやどべかどる』から使用が開始される連綿活字は50-60%に留まり、

- 2) 後期国字本にはこのほかに『朗詠雑筆』『太平記抜書』『ひですの経（現所在不明）』がある。なお、『おらしよの翻訳』と『どちりなきりしたん』はともに1600年刊行だが、表2に示すように、連綿活字「おら」の使用が『さるばとるむんち』『ぎやどべかどる』『おらしよの翻訳』にみられず、『どちりなきりしたん』に認められるため、印刷はこの順序だったと考えて差し支えない。
- 3) とくに『おらしよの翻訳』は汚損が激しいため残念ながら完全な調査は望めない。中根勝（1999）も参考としたが、連綿活字種の認定や使用回数について完全に一致しない箇所があった。ここでは自ら調査した結果を示しておく。
- 4) 但し、「ならず」のような文字列では、「なら」「らず」の二種類の連綿活字が使用可能であり、こうした関係を考慮する必要があるが、今回は単純に連綿・非連綿を交換可能な回数を累積した。つまり「/な/ら/ず/」（“/”は活字の切れ目を示す）であれば、「/な/ら/」の非連綿1回、「/ら/ず/」の非連綿1回として数え、「/なら/ず/」であれば、「/なら/」の連綿1回（「/ら/ず/」の非連綿0回）として数えている。
- 5) 1%水準で有意な差が認められる。使用率が100%に達しない理由には、後述のように自立語の開始位置を跨ぐ位置で連綿活字を使用しないという合理的な理由によるものも含まれる。

表2. 連綿と非連綿

	さるばとる		ぎやど		おらしよ		どちりな		
	連綿	非連	連綿	非連	連綿	悲連	連綿	非連	
あけ			3						
あげ			36	3	2		13		
あそび			1						
あにま	14		60	205	7	10	15	28	
あら	45		75		9	1	125	13	
あり		87	295	1	12		98		
ある	32		321		46		210	3	
あん	12		95		19	1	17		
いふ	19		873	1	11		120		
いへ		3	362	4	4	1	61	9	
いろは			1						
いん	5		95		29		17		
うけ	5	1	111		13	2	53	3	
おら		17		61		70	58	1	
おん	2		38	1			3		
かゝ			51		2		14		
かゞ	1		4				15	3	
かけ	8		87	5	10		19		
かげ							8		
がけ	1		5	1			1		
かす	6		12	2	5	3	9	8	
かず	3		21		1		3	1	
がず			2	3					
かた	5	3	28	1	13	3	22	9	
がた	1	3	16	1	1	2	14	20	
かて			1	1				1	
がて			1	2		1		4	
かな	9		53	4	14	1	131	7	
から	27		228	2	28		167	2	
がら	26		201		5	1	47		
かり	9	1	61		15		78		
がり			11		2		7	1	
かる	3	2	93		6	1	42	2	
がる			3	1	1	1			
かん	6		23		8		69		
がん			2		1				
きん	1		2				4		
ぎん			1						
くハ	21	2	4	1	37	1	65	5	
ぐハ				1	1		1	3	
くる		13	60	27	15	7	34	68	
くん		2	7		4	2	7	1	
ぐん			2						
けり	1		1						
ける	1		51			1		8	
げる			2		2			2	
けれ	10	1	122	3	12			87	1
げれ			28					1	
けん	15	1	10		4			22	
げん	1	2	2	1	3	1		23	
こそ			21					3	
こと		3	10	7	4	6		10	59
ことく			1						
ごとく	13		416		6			71	
ごとし	2		57						
ことに		1	1		10	2		16	
ごとに	1	1	7		1			4	
こと葉			20		4			10	
こる			16		1			7	
ごる			1						
こゑ	1								
ごゑ	1								
こん	61	5	88		11	1		80	1
ごん	4				1			3	1
さゝ	1		2	1	1			9	
さゞ	10		9		1			4	
さす		1	11	3				2	
さず		5	48	2	1			8	4
させ		7	18	30	1	6		2	9
さへ	2		87					4	
ざべ					1			2	
さら			38	6				3	
ざら			2	1					
さり		2	16					14	
ざり	5		19						
さる	5	1	64	1	8			9	
ざる	35		393		4			69	
され	7	3	102	1	7	1		25	1
ざれ	3		40	1				3	1
さん	74		377		69			217	
ざん	1				1			2	
しき	5	1	159	10	16	2		68	2
しぎ								2	
じき	13		10	6	3			20	
して	44		853	6	14			154	1
じて	1		67		1			11	

表 2. 連綿と非連綿 (2)

	さるぼとる		ぎやど		おらしよ		どちりな			さるぼとる		ぎやど		おらしよ		どちりな	
	連綿	非連	連綿	非連	連綿	悲連	連綿	非連		連綿	非連	連綿	非連	連綿	悲連	連綿	非連
しみ	8	1	132	10	8		11	3	たる	153	633	4	21		204		
しめ	4		27	3			8		だる		1		1		3		
じめ			6		1	2	15		たん	15	44	2	9		76		
しも	1	1	7	2	5	1	14	4	だん	1	8		4		7		
しや		27		129	2	31	10	79	ちん	1			2	1			
じや		11		45	1	17	10	85	ちん						1		
しやう		7			2	17	9	40	つく		1	10	3	2	23	16	
じやう		2			1	6	3	13	づく			30	1	1	2	11	
しよ	16	7	52	24	26	17	141	6	つけ	6		30		3	12		
じよ	5	1	137	1	11		21		つげ				1	1	7		
しる	4		19	2	3	1	21	5	づけ		1	3	2		19		
じる			1						つゝ	3		12		4	1		
しん	3		1		47		138		つゞ			1			4		
じん			2				14		づゝ	5	1	6	2		3		
すべ	24	3	46	27	6	6	28	5	つら			3	3		2	3	
する	30		433	74	4		84		つる	2		7	4	11	24	1	
ずる	1		78	15	1		8		づる			3	1		10		
すん					1	3	1		てる	8	1	11	32		34		
ずん	5		31	1			10		でる	2							
せす	2				1		2		てれ	9		17	13		28		
せず	4		48	4			17	1	でれ			1	1				
ぜす			2	2					てん	8		34	7	16	77	12	
ぜず	17		3		6	1	2		でん			5	3		6		
せぬ				3			1		とか		1	44	1		1	5	
ぜぬ			1	2					とが		1	3	1	4	10	137	
せば		2	14	36	1	1	7	4	とく			5	1	3	4	14	
せる	4		1		2		7		とて	3	1	84	28	1	62	2	
ぜる			6		2				とゝ		1	9	2		13	7	
せん	3		28		4		15		との		15	82	1	15	12	74	
ぜん	18		33		19		90		とは			2			12	4	
その		2	27	6	5	14	14	241	とふ		1	3				1	
ぞや			6				46	10	とぶ						1	6	
それ		16	56	124	1	1	16	44	とへ			2			2	16	
それに	1	1	17	20	2		8	7	とも	25		172	1	9	86	5	
たえ			7	6			1		ども	13		283	7		81		
たく		4		5	1	1	6	6	とり		8	15	14	3	2	12	22
たす	1		5	1	8	6	22	4	とん	2		1	4		4		
たず			6	1			5		どん						1		
だす	1		1				2	4	なく	3	14	52	139	4	7	18	28
たゝ		1	6	1			2		なし	6		459	24	14	1	59	
たゞ	1	3	7		6	1	59	2	なじ			2	3		13	1	
たり	28	1	153	5	7	1	18		なす	7		166	6	3	17	1	
だり		3		10	1	6	23		なら	20	1	115	8		34	1	

表2. 連綿と非連綿 (3)

	さるばとる		ぎやど		おらしよ		どちりな	
	連綿	非連	連綿	非連	連綿	悲連	連綿	非連
なり	42		548	1	56		406	
なる	36		1067	10	24		177	
なれ		15	24	128	1		12	41
なん	3		4		3		26	
にて	29		320	7	44	1	115	1
にハ	35		386	34	79		198	
にも	12	4	185	12	4	1	47	18
にや		4	1	6		3	1	3
にん	3				7		56	3
ねん	4		13		12	2	34	
のゝ		2	18	38	1	1	7	5
のみ	8	1	165	11	16	5	55	29
ハかり	1		1					
バかり	6		13				6	
はく			14				4	
ぼく	1		13				1	1
ハす	13	3	59	13		2	9	8
はず	8		140	1	1		30	3
はず	2		31				5	
はぬ	6	1	21				22	
ばぬ	1		9					
はゝ					1		30	
ハゝ			2					
ハゞ	7		53		1		3	
はゞ			4				1	
はり	1		8		3	1	39	
ハる		1	23	8	3		8	
ハん	10		164		10		62	
ほん							10	
ぼん	11		1		8		42	
ぼん				3		4	3	6
ひし		2		16	1	1	1	4
びし		2		1			3	1
びじ					2			
ひる			1		2		6	
びる	4	1	11		27		34	
ひん			4		1		3	
びん	1		2					
ふり	3		3		2	1	2	1
ぶり	1		3					
ふる			79		4		41	
ぶる	1		16		1		3	
ふん					1		33	
ぶん	1						5	14
へき			1	1	1			1
べき	58	2	854	9	29		150	1
へん	1		26	2			8	1
べん	2		8		4		6	
ぺん	2	2			1	9	5	3
ほし		1	6	3			4	
ぼし	1		13		3		12	
ほと	2			1				
ほど	13		237	2	3		52	1
ほん							1	
ぼん		2			1	1	4	
まし	4	3	86	1	44		83	
まじ	6		82	1	4		19	
ます	6		233	1	38		98	
まず			22	2			9	1
また			27	2	1	1	17	5
まだ	20		22		2		6	
まで			13	6				1
まで	4		127	7	3		20	
まなぶ			2					
まは							2	
まぼ	1		3	1			1	
まゝ		2	32		2		11	
まり	10	1	36		48	2	69	1
まる			35		3		12	
まん	4		11		5		79	
みん	4		6		5		11	
むる	10		192	8	6		39	
めし	7		19	4	2		17	
めす			19	1	2		11	
めず	1		16	1			2	1
めん	35		72		50		160	8
もし		5	27	29	1	1	7	14
もて	12		244	11	24	3	105	25
もに			96	3	6		23	1
ものゝ			8	1	1		6	3
もふ			104	2	2		3	12
もる		21	11	22	5	3	8	45
もん	12		39		3		27	
ゆへ	7	1	166		3		81	
ゆる	15		63		16		62	
ゆん	2		14		1		20	23

表2. 連綿と非連綿 (4)

	さるばとる		ぎやど		おらしよ		どちりな			さるばとる		ぎやど		おらしよ		どちりな	
	連綿	非連	連綿	非連	連綿	悲連	連綿	非連		連綿	非連	連綿	非連	連綿	悲連	連綿	非連
よき	2	1	87	2	3		21	3	をひて	26		404		13		79	
よく	13		80		7	2	43		をも		20	30	148	1	4	8	51
よし		1	15				1	2	一たび			15		1		10	
よひ		1	2				4	1	右に			15	35	2	1	4	
よび		1	22		1		4		玉ひ	6		398		30		69	
よふ			2				1		玉ふ	26		1263		85		287	
よぶ		1	7				6	1	玉へ			25	1	3		32	
より	45		675		30	1	182		故に		4	37	298			5	
よる			8			1	3		昨日			1	1				
らす			2	10				1	思ひ	18		141		4		27	
らず	5	1	93	53	2	1	17	13	思ふ		1	57	37			11	
らに		1	1			1	3	8	者也	6		701	43			44	
らる	1		19				3		拾ひ			2					
らるゝ			30		2		17		条々	17		31				1	1
られ	3		127	2	11		29	1	人に		28	24	169	1	3	3	21
らん	10		317	1	10		33	1	宣ふ	3		265	7			5	
りん	2		4		1		6		然る		2	33	33	1	1	4	
るゝ	16	1	198	4	5		35		如何	18		456		1		4	
れす			6	6	1	1	6	17	如此	14		130					
れず		1	16	8			2	5	不足	2	1	10	22				
れば		15	33	123	2	1	13	12	奉ら		3	19	48	2	1	9	2
れり			2	8					奉り	12		196		14		39	
れる	2		2	4				1	奉る	33		478	1	61	1	176	
れん	7	1	39		2		9		与へ	12		272	1	3		3	
わか							1	2	茲に	2		28	9				
わが		6	63	118	2	11	9	49	(計)	1827	488	23380	2930	1822	393	8483	1665

表3. 連綿活字の選択

文献	連綿	非連綿	連綿活字使用率
さるばとる	1827	87	95.5%
ぎやど	23380	2506	90.3%
おらしよ	1822	314	85.3%
どちりな	8483	1665	83.6%

表4. 使用開始時期と連綿活字

使用開始文献	さるばとる	ぎやど	おらしよ	どちりな
さるばとる～	1827-87 (95.5%)	20994-716 (96.7%)	1650-116 (93.4%)	7307-323 (95.8%)
ぎやど～	0-305	2386-1790 (57.1%)	149-92 (61.8%)	874-830 (51.3%)
おらしよ～	0-75	0-305	23-106 (17.8%)	179-462 (27.9%)
どちりな～	0-21	0-119	0-79	123-50 (71.1%)

(※連綿-非連綿 (使用率))

以下も同様に低い使用率を示す⁶⁾。したがって、連綿活字の使用率が低下したのは後から追加使用される連綿活字の使用率が低いためであることが分かるが、このことは、『さるぼとるむんち』から使用された連綿活字は計画的な製作と使用がなされ、追加された連綿活字はそうした方針が徹底しなかったことを示している⁷⁾。

2.3. 連綿活字が使用される文字列

それでは、どのような文字列から優先的に連綿活字が使用されるのだろうか。『さるぼとるむんち』の2字の文字列の頻度と連綿活字使用の関係をみる(表5)。

表5. 文字列の頻度と連綿活字

度数	出現文字列種数	連綿活字使用文字列種数	比率
～5	3111	72	2.3%
～10	255	32	11.1%
～15	86	16	15.7%
～20	40	14	26.0%
～25	19	3	13.6%
～30	18	8	30.8%
～35	9	5	35.7%
～40	7	2	22.2%
41～	19	9	32.1%

ここでいう「連綿活字使用文字列種」は、連綿活字が1回以上使用された2字の文字列の異なり数を示す。文字列出現頻度が5回以下では、連綿活字が使用された文字列種の比率は2.3%に過ぎないが、出現頻度が高くなるにつれて比率も上昇することがわかる。

次に、後続文献で使用が開始する連綿活字にはどのような特徴があるのかをみるため、調査した4文献で連綿活字が使用される文字列の延べ数を連綿活字種で除算した結果を示し、どれくらいの頻度で出現する文字列なのかを文献毎に示した。例えば、『さるぼとるむんち』の11.5は、表4に示した連綿1827回+非連綿87回を『さるぼとるむんち』から使用が開始される連綿活字167種で除算した結果である(表6)。

『さるぼとるむんち』では、連綿活字が一度でも使用された文字列の頻度平均は11.5回である。『さるぼとるむんち』で連綿活字が対応しない文字列(表中の括弧内)のうち『ぎやどべかどる』から連綿活字の使用が開始される文字列の頻度平均は2.9回、『おらしよの翻訳』3.9回、『どちりなきりしたん』1.2回、で11.5回より低く、高頻度の文字列に優先して使用を開始するといえる。この傾向は後続文献でも同様であるが、使用頻度の高い文字列に優先して連綿活

6) 『おらしよの翻訳』から使用が開始される連綿活字の使用頻度は20%以下で他より低い。「しや」(連綿2-非連綿31)と「じや」(1-17)、「しやう」(2-17)と「じやう」(1-6)、「との」(1-15)など、連綿活字がまれに使用される文字列を含むためだが、連綿活字の使用が文献の後寄りにみられることが多いというほか、目立った特徴は確認できなかった。「しや」「じや」などの清濁の対応は3.1に後述するとおりである。

7) この点については、鈴木(2006)の指摘するような複数の連綿活字における「版面の単調さを回避する」効果が、連綿・非連綿の選択にあたって考慮されたと考えることもできる。

表 6. 出現頻度と連綿活字

使用開始文献	さるぼどる	ぎやど	おらしよ	どちな
さるぼとる～	11.5	130.0	10.6	45.7
ぎやど～	(2.9)	39.8	2.3	16.2
おらしよ～	(3.9)	(16.1)	6.8	33.7
どちな～	(1.2)	(6.6)	(4.4)	9.6

字を使用したのは、少ない種類の活字を繰り返し利用するという活字印刷の効率性の点からも当然なことに思える。

しかし、連綿活字は必ずしも文字列の出現頻度だけから説明できるわけではない。例えば、『さるぼとるむんち』では高頻度（25回以上）の文字列（ここでは2文字に限定、括弧内は頻度）に連綿活字を使用しない一方で、低頻度（2回以下）の文字列に連綿活字を使用したものが多数ある。

- ・高頻度（25回以上）だが非連綿：りや（101）、る事（96）、あり（87）、べし（79）、事あ（69）、んと（57）、した（55）、んを（53）、科を（49）、りし（44）、にあ（40）、ひさ（40）、んひ（40）、ひて（36）、やう（36）、うす（34）、きり（33）、るべ（33）、人に（31）、き事（30）、でう（29）、にを（29）、る科（29）、るに（28）、をも（28）、しや（27）、をひ（27）、人の（27）、事を（26）、りと（25）、るた（25）、
- ・低頻度（2回以下）だが連綿：おん、かゞ、がけ、きん、けり、ける、こゑ、ごゑ、さゝ、さへ、ざん、じて、しも、ずる、せず、たす、だす、だん、ちん、つる、でる、とん、ぼく、バズ、ばぬ、はり、びん、ぶり、ぶる、ぶん、へん、べん、ぼし、ほと、まば、めず、ゆん、らる、りん、れる、不足、茲に、

高頻度だが非連綿となる「る事」「事あ」「にあ」「き事」などは、豊島（2001）で指摘された、「自立語の開始位置を跨ぐ連綿活字は使用しない」という原則に従うものである。「あり」87回や「べし」79回は高頻度だが『さるぼとるむんち』では連綿活字が使用されない⁸⁾。「んと」「んを」「科を」「人に」「にを」「るに」「をも」など、2字で助詞にかかる文字列にも非連綿が目立つ。一方で、低頻度であるのに連綿を使用した文字列には「がけ」「ごゑ」「ざん」「じて」など濁音に関連するものが多く、清濁の対応関係にある文字列が比較的高頻度だという特徴がある。「おん」「きん」「だん」「ちん」「とん」など「ん」で終わる文字列も多い。

従って、連綿活字の使用基準の特徴として、

- ・原則として高頻度の文字列に優先して使用する。

ことが確認できるが、

- ・清濁関係で対応する文字列が高頻度なら頻度に関係なく連綿活字を使用する。

8) 『さるぼとるむんち』で高頻度にもかかわらず非連綿となる文字列のうち、「あり」「人に」「をも」「しや」は後続文献で連綿活字が使用される。

- ・「ん」に終わる文字列には頻度に関係なく連綿活字を使用する。
- ・2文字目が助詞で終わる連綿活字は対応する文字列の頻度に関係なく少ない。

などの例外がある。以下、この例外を連綿活字の製作と使用の両面から検討する。

3. 連綿活字と活字製作

3.1. 清濁の仮名

後期国字本の濁音仮名は対応する清音仮名と活字デザインが同一である。活字父型の流用が予想されるが、図1のように本来出現しない文字列に対応する連綿活字が存在することはどう考えるべきだろうか。

図1. 本来出現しない文字列に対応する連綿活字



さるばとる 3ウ10



さるばとる 4ウ8



さるばとる 16オ10

これらはすべて「べき」相当の箇所で使用されており、使用上は誤植と考えられるが、活字製作時に実用性を考慮せず濁音符付き連綿活字を製作していたことが推定される⁹⁾。

また、『さるばとるむんち』で低頻度(1回)の文字列に連綿活字を使用した30余例のうち、ざん-さん(1-74)、じて-して(1-44)、ずる-する(1-30)、げん-けん(1-15)、だん-たん(1-15)、がけ-かけ(1-8)、ばぬ-はぬ(1-6)、がた-かた(1-5)、などは、清音仮名を含む高頻度な文字列が初めに連綿活字の対象となり、そこに濁音符を付加する発想で選定され、活字製作の工程で濁音符を取り去る方法で製作されたと考えられる。こうした連綿活字の存在は、連綿活字の候補を選択する際に、活字製作の効率性という物理的条件が強く働いたことを示している。

3.2. 「ん」で終わる文字列

『さるばとるむんち』の印刷に先立ち、「ん」で終わる連綿活字は一括して製作候補に挙がっていたようであり、低頻度(1回)の文字列であっても使用を開始する(表7)。

「ん」で終わる連綿活字の使用率は、それぞれ連綿活字を保有する文字列において、『さるばとるむんち』(連綿331-非連綿8)で97.6%、『ぎやどべかどる』(1293-14)で98.9%、『おらしよの翻訳』(375-12)で96.9%、『どちなきりしたん』(1500-50)で96.8%であり、表4

9) これ以外に、濁音符の位置にゴミ状の痕跡がみえる印影が『さるばとるむんち』に多数、『ぎやどべかどる』上巻の冒頭部分に散見する。同様の例は「べき」以外にも多い。また、これに限らず、後期国字本活字の濁音符には、半濁音符を半分切断したような形状のものや、区別が付きにくいものも多くみられる。福島邦道(1973)では、『落葉集』を中心に本来濁音符が適当な箇所に半濁音符が使用されることを論じているが、活字の使用に際して一部に流用があり、その加工が不完全であることに注意せず使用した活字もあったと考えたい。

表7. 「ん」で終わる文字列

	さるばとる		ぎやど		おらしよ		どちな	
	連綿	非連	連綿	非連	連綿	非連	連綿	非連
あん	12		95		19	1	17	
いん	5		95		29		17	
△うん				1		13	8	
▲えん		1		24			9	
おん	2		38	1			3	
かん	6		23		8		69	
がん			2		1			
●きん	1		2				4	
ぎん			1					
×くん		2	7		4	2	7	1
ぐん			2					
けん	15	1	10		4		22	
げん	1	2	2	1	3	1	23	
こん	61	5	88		11	1	80	1
ごん	4				1		3	1
さん	74		377		69		217	
●ざん	1				1		2	
しん	3		1		47		138	
○じん			2				14	
すん					1	3	1	
ずん	5		31	1			10	
せん	3		28		4		15	
ぜん	18		33		19		90	
▲そん		2		2				25
△ぞん				2		5		10
たん	15		44	2	9		76	
●だん	1		8		4		7	
●ちん	1				2	1		
ちん							1	
▽つん							7	
▽づん							2	
てん	8		34	7	16		77	12
○でん								5
とん	2							1
どん								4
なん	3							3
にん	3							7
▽ぬん								10
ねん	4							13
▽のん								12
はん	10							2
はん								10
はん								164
はん								10
はん								62
はん								10
ぼん	11							8
○ひん								4
●びん	1							1
○ぶん								5
●ぶん	1							1
●へん	1							26
べん	2							2
ほん								8
×ぼん								2
まん	4							11
みん	4							6
▽むん								4
めん	35							72
もん	12							39
やん								50
ゆん	2							3
▲よん								14
わん								17
ゐん								1
▲ゑん								2
△をん								63
(計)	331	18	1293	123	375	72	1500	140

で検討した連綿活字全体の比率よりも高く維持されている。また、『ぎやどべかどる』や『どちなきりしたん』で新たに使用が開始される連綿活字に限れば100%の使用率であり、他の連綿活字とは対照的である。

「ん」で終わる連綿活字は、漢語を仮名表記することの多い『さるばとるむんち』『おらしよの翻訳』『どちなきりしたん』において漢字表記の代替を担い、漢字相当文字列を他と区別することに大きく貢献している。例えば、『さるばとるむんち』で僅か1回しか出現しない文字列に連綿活字を用いた「きん」「ざん」「だん」「ちん」「びん」「ぶん」「へん」(表7●印)は、それぞれ「ざん＝讒」「だん＝断」「ちん＝陳」「びん＝便」「ぶん＝分」などの漢字に対応し、

文字列自体の頻度が低いにもかかわらず連綿活字が使用されている。「きん=きんた(五日)」は非漢語だが後続文献では「きん=金」、同じく「へん=わきまへん」も非漢語だが後続文献では「へん=返」として使用される。漢字表記の代替という点で見れば、調査した4文献全体では、「がん^{*}」「ぐん^{*}」「すん」「ずん」「つん」「づん」「ぬん」「のん」「ハん」「むん」「ゆん」「よん」「ゑん」に漢字表記の代替がみられない(「やん」「わん」「ゐん」は文字列そのものがない)。このうち、連綿活字が使用されたものに下線を付したが、^{*}印の「がん」「ぐん」はそれぞれ「かん」「くん」との清濁関係に基づき製作された(3.1参照)と考えれば、漢字表記の代替がなく連綿活字を使用したのは「すん」「ずん」「はん」であり、それ以外は漢字表記の代替がなく連綿活字を使用しない。とくに「よん」「ゑん」は非連綿で使用された例が多く、このことは「ん」で終わる連綿活字の製作にあたって漢字表記の代替が考慮されたことを示している¹⁰⁾。

また、『さるばとるんむんち』で連綿活字を使用しない「そん」「ぼん」「よん」「ゑん」(同▲印)は、後続文献で頻度が高くても連綿活字を使用しないという特徴がある。「うん」「ぞん」「をん」(同△印)は『さるばとるむんち』に文字列自体がみられず確認できないが、後続文献での傾向を見る限りこれと同様に考えてよい。また「つん」「づん」「ぬん」「のん」「むん」(同▽印)も同じ集合に属する可能性がある。このことから、『さるばとるむんち』に先立つ活字製作で候補に挙がらず、連綿活字が製作されなかったと思われる文字列については、後続の文献でも連綿活字を使用していない(これに反するのは「くん」「ぼん」(同×印)しかない)ことが指摘できる。

つまり、『さるばとるむんち』に先立つ当初の活字製作時の方針では、「ん」で終わる連綿活字が漢字表記の代替などの理由によって選定され、使用頻度を度外視して優先的に製作された、そして、以後は使用率こそ高く維持されるものの、追加製作については他の文字列と同様の条件で扱われ候補に入らなかった、と考えられる。

以上より、『さるばとるむんち』の印刷に先だって準備された初期の連綿活字は、清濁関係による活字製作の効率性や、漢字の仮名表記に使用し易い「ん」で終わる連綿活字の優先などの方針に基づいて製作されたものが多数を占めていたと結論できる。そのため、全体として見れば、当初は一部の高頻度な文字列に連綿活字を使用せず、後続文献で追加するなど修正も加えられているが、漢語が多く、しかも漢字を仮名表記することが多い文献を、活字製作の効率性も考慮しながら印刷する方法としては適切な判断だったと考えられる。

4. 連綿活字と活字使用

4.1. 助詞にかかる連綿

豊島(2001)に指摘されるとおり、後期国字本の連綿活字は自立語の開始を跨がない位置に使用されており、可読性の向上に大きく貢献している¹¹⁾。この点について更に詳しくみると、連綿活字のなかには使用方針が徹底しているものがあり、例えば連綿活字「のみ」は、自立語

10) もっとも、漢字表記の代替をしながら連綿活字を使用しない「うん」「えん」「そん」「ぞん」「をん」もあり、検討が必要であることは言うまでもない。

11) この原則に反する例はごく僅かである。

/こ/れ/又/が/く/し/や/た/ち/の/う/べ/を/ける/ごとく/(どちりな1ウ4)

/が/ら/さ/を/み/ち/へ/て/も/ち/玉/ふ/が/ゆ/へ/に/X/と/う/な/へ/奉/る/也/(どちりな5オ10)

これらは例外的な誤植としてみるべきか、今後、出版を重ねることで増加する特徴なのか、調査範囲からは判断できない。

の開始を跨ぐ位置で連綿しないのは勿論、これ以外の箇所では悉く連綿活字を用いている。つまり、自立語の開始位置を跨ぐか否かで連綿活字使用の有無が決定する（表 8）。

表 8. 自立語の開始位置

	跨ぎ有り		跨ぎ無し	
	連綿	非連綿	連綿	非連綿
さるばとる	0	1	8	0
ぎやど	0	11	165	0
おらしよ	0	5	16	0
どちりな	0	29	55	0

例をいくつか示しておく。

/酒/を/の/み/たる/事/あ/り/や/ (さるばとる 20 オ 4)

/潔/よ/く/偏/に/御/大/切/の/み/に/燃/立/玉/ふ/者/なり/ (ぎやど上 5 オ 15)

/さ/れば/よ/く/た/の/み/奉/る/た/め/に/ハ/ (どちりな 9 ウ 17)

/妄/念/言/語/進/退/の/み/だ/り/なる/を/も/て/け/が/る/、/事/ (さるばとる 3 ウ 7)

/風/波/の/難/を/遁/る/、/船/の/み/な/と/敵/の/や/じ/り/を/防/ぐ/楯/也/ (ぎやど上 79 ウ 4)

/ま/こ/と/の/み/ち/を/ひ/ろ/め/よ/と/の/御/事/也/ (どちりな 1 ウ 4)

自立語の開始位置を跨ぐ位置で非連綿になることはいうまでもないが、開始位置以外で連綿活字を使用しなかった場合、「～の見たる」「御大切の身に」「他の見奉る」など語の区切りを誤って認定するおそれがある。連綿活字は、語の区切りを明確にする効果を発揮することがある。

但し、上記のような顕著な傾向が現れた理由は、これが助詞としても読み得る「の」を含む文字列であるために他ならない。これに関連して助詞にかかる位置についてみると、後期国字本の前期では後期に比べて相対的に助詞にかかる連綿活字が少なく、とくに『さるばとるむんぢ』では語尾から助詞にかかる連綿活字が殆どみられないことが分かる。

表 9 は「の」「に」「も」「は (ハ)」「を」にかかる連綿活字を一覧し、テキストの内容によって分類したものである。掲出にあたっては煩雑を避け各分類内で初出の箇所のみを記した（「それに」は『ぎやどべかどる』以降も、語から助詞にかかる位置で使用されている。）。

表 9. 助詞にかかる連綿

使用開始文献	語+助詞	助詞+助詞	語尾+助詞	一語	語の一部
さるばとる～	茲に、それに、ごとに	にも、にハ	くハ		くハ
ぎやど～	もの、右に、人に、故に	をも、にも	の、ことに、もに、人に、ハ、くハ	その	の、ハ、にも
おらしよ～			との	は	ぐハ
どちりな～		とは、との	らに、とは、まは		

『さるぼとるむんち』では、語尾から助詞にかかる位置で連綿活字が「かるくハ」「おもくハ」の2例を除いて使用されない。『ぎやどべかどる』以降の文献では頻繁に使用されるようになるが、先行する文献で非連綿だった箇所が連綿活字に置き換わることもある（“/”は活字の切れ目を示す）。

/と/り/け/だ/も/のハ/な/き/ご/ゑ/を/き/に/か/け/た/る/事/ (さるぼとる 10 ウ 11)
 /い/ん/へ/る/のハ/苦/し/み/を/のが/し/玉/ひ/ (さるぼとる 21 オ 12)
 /い/ん/へ/る/のハ/苦/患/ハ/終/る/と/い/ふ/事/な/く/ (ぎやど上 38 オ 17)
 /さ/ん/と/あぐ/す/ち/い/のハ/云/く/ (ぎやど上 43 ウ 5)

/ゑ/す/き/り/つ/う/ら/に/見/ゆ/る/ご/と/く/ (さるぼとる 21 オ 1)
 /折/節/草/む/ら/に/す/だ/く/虫/の聲/々/ (ぎやど上 70 ウ 1)
 /い/し/のは/し/ら/に/か/ら/め/つ/け/ら/れ/ (おらしよ 17 オ 11)
 /わ/れ/ら/に/つ/げ/し/ら/せ/玉/ふ/ほ/ど/の事/を/ (どちりな 17 ウ 15)

また、『ぎやどべかどる』の「のハ」「人に」のように、使用が開始された連綿活字が使用箇所を制限されることはない。

/虚/し/き/影/に/恐/れ/て/震/ひ/を/のハ/く/者/也/ (ぎやど上 74 オ 10)
 /我/等/が/か/た/き/心/ハ/い/ん/へ/る/のハ/火/に/て/も/和/ら/が/ず/ (ぎやど上 19 ウ 11)
 /ゑ/う/せ/び/よ/ゑ/み/せ/のハ/い/へ/る/ご/と/く/ (ぎやど上 29 オ 4)

/現/在/よ/り/悪/人/に/与/へ/玉/ふ/映/の一/ツ/と/い/ふ/ハ/ (ぎやど上 75 オ 15)
 /猶/悪/人/に/馳/向/ふ/小/船/の逆/風/と/な/る/也/ (ぎやど上 91 オ 12)

仮に連綿活字が語の区切り位置の判断を妨げない、という方針があったとすると、語尾から助詞にかかる位置に使用したのは適切でない。このことは、『どちりなきりしたん』の連綿活字「との」をみれば明らかである。

/科/を/く/り/を/さ/づ/け/ら/れ/よ/と/の儀/也/ (さるぼとる 1 ウ 9)
 /恩/を/勘/弁/して/即/其/御/主/へ/仕/へ/申/せ/と/の御/事/也/ (ぎやど上 13 ウ 6)
 /ま/こ/と/のみ/ち/を/ひ/ろ/め/よ/と/の御/事/也/ (どちりな 1 ウ 4)
 /お/ぼ/し/め/す/ま/ハ/に/つ/か/へ/奉/れ/か/し/と/の儀/也/ (どちりな 11 オ 14)

以上は助詞の連続であり誤読のおそれは無い。問題は語末から助詞にかかる位置である。

/す/び/り/つ/さん/と/のが/ら/さ/我/等/が/あ/に/ま/に/来/り/玉/ふ/ (さるぼとる 2 ウ 4)
 /す/び/り/つ/さん/と/の御/与/へ/と/な/る/荘/殿/也/ (ぎやど上 62 ウ 5)
 /す/び/り/つ/さん/と/のみ/な/を/も/て/ (どちりな 7 オ 13)
 /そ/のべ/あ/との/い/は/ひ/を/を/こ/なひ/玉/ふ/と/き/ (どちりな 16 ウ 10)
 /ま/こ/と/のD/に/て/ま/し/ま/す/御/あ/る/じ/ (どちりな 26 ウ 6)

『どちなきりしたん』の例では、直前が原語であるため、日本語ではない原語についての正確な理解が不足すると「すぶりつさん、との」「べあ、との」という誤読のおそれがあり、連綿活字を使用したことで語の区切れ位置はかえって分かり難くなっている。『さるぼとるむんち』ではこのような事態は起こらないが、後続の文献で連綿活字の使用箇所を選ばないことを考慮するなら、これは、3.2で検討した「ん」で終わる連綿活字の場合と同様に、語末から助詞にかかる位置に転用可能な連綿活字をそもそも保有していないためだと思われる。このことは、活字使用時に自立語の開始位置を避けて連綿活字を用いたのとは対照的であり、後期国字本の初期段階では助詞にかかる連綿活字の製作に消極的という、活字製作時の方針による結果だと考えられる。

4.2. 分かち書き

分かち書きは連綿活字ではないが、関連する内容なので触れておきたい。

後期国字本には部分的に分かち書きが認められる。この分かち書きは、主に格助詞「の」「を」「に」などの直後に一定の空白を置くものだが必須ではない。文末のほか、語や助動詞のうしろに広めの空白がみられることも多い。但し、一部を除いて語の途中で空白が置かれることはないため、語の区切り表示において補助的な役割を担うものと考えられる。

『さるぼとるむんち』にみられる顕著な例としては、

/それ/ゝゝ/に/_/あ/ひ/あ/た/る/ (さるぼとる 1ウ8)
 /種/々/の/妄/念/ /言/語/ /進/退/の/_/み/だ/り/ /なる/を/ (さるぼとる 3ウ7)
 /汝/が/訴/訟/を/_/き/こ/し/め/し/叶/へ/給/はん/と/ /おぼし/ (さるぼとる 8オ10)

などがあり、ほぼ漢字一文字の高さの半分に相当する空白が置かれている。「に あひ」「のみ」「を き」など、空白がなければ一つの語として読まれかねない箇所に空白が置かれ、語を区切っているようにも見える。

空白は語の区切りに対応するものばかりではないため、方針として明確だったとは考えられない。おそらく行末を揃える際になされた調整に伴う処置だと思われるが、分かち書きは連綿活字と共に語の区切りを示す効果を発揮することがある。

5. まとめ

キリシタン版後期国字本の連綿活字の特徴をまとめておく。

1. 原則として頻度の高い文字列は連綿活字が使用されることが多い。
2. 後から追加される連綿活字は当初から使用される連綿活字に比べて使用頻度が低い。
3. 清濁関係により製作されたと思われる連綿活字は対象となる文字列の頻度に関係なく製作される。
4. 「ん」で終わり漢字表記を代替する連綿活字は対象となる文字列の頻度に関係なく製作される（これは当初の活字製作時に限り有効な方針である）。
5. (ごく一部を除き) 連綿活字は自立語の開始位置を跨がない（豊島（2001））。
6. 『さるぼとるむんち』では助詞にかかる位置での連綿活字の使用が少なく、後続文献で増加

しているが、このことは活字製作時の方針であり、活字使用时には助詞にかかるか否かは考慮されない。

7. 分かち書きのような空白がある場合は、語の切れ目に置かれることが多い。

1. は活字印刷の常識にも一致した原則である。これに反する例からキリシタン版後期国字本の連綿活字の特徴をみた。3. や 4. は、連綿活字製作時に選定された対象文字列の多くが、個別のテキストを分析した上でのものではなく、清濁関係による活字製作の効率性や、漢字の仮名表記に使用し易い連綿活字の優先などの方針に基づくものだったことを示している。また 2. は、後から追加された連綿活字では、当初から使用される連綿活字のような計画的な使用がされなかったことを示しているが、この理由についてはなお検討が必要である。

また、6. のようにキリシタン版後期国字本が助詞にかかる連綿活字の使用に消極的なのは、3. や 4. と同様に連綿活字製作時における対象文字列選定に由来しており、5. のような自立語の開始位置での連綿活字の回避や、ローマ字本にみられる助詞の分かち書きのような活字使用时にみられる処理とは異なる。ただし、7. にも示したように、後期国字本には語の区切りの表示という言語表現上の効果への配慮がみられ、連綿活字もその一部を担ったと考えられる。

キリシタン版後期国字本における連綿には、日本側の文献とは異なった特徴があったことを指摘しておきたい。

追 記

本稿の脱稿後に、『さるばとるむんち』の連綿活字（連続活字）を同年に書写された「狭衣の中將」の連綿表記と比較した鄭炫赫（2008）が発表された。

参 考 資 料

調査にあたっては以下の複製本所収の影印を用いた。
海老沢有道編（1978）『サルバートル・ムンヂ』有松堂書店
天理図書館善本叢書和書之部編集委員会（1981）『きりしたん版集一・同附録』天理大学出版部
小島幸枝編（1971）『どちりなきりしたん総索引』風間書房

参 考 文 献

新井トシ（1957-59）「きりしたん版國字本の印行について（一）～（六）」『ビブリア』23.24.29.30.31.34
天理大学附属図書館
鈴木広光（2006）「嵯峨本『伊勢物語』の活字と組版」『近世文藝』84 日本近世文学会
鄭炫赫（2008）「キリシタン版『さるばとるむんち』の連続活字」『アクセント史資料研究会論集』IV号
アクセント史資料研究会
天理大学図書館（1973）『きりしたん版の研究』天理大学出版部
豊島正之（2001）「ぎやどべかどる解題」（尾原悟編『ぎやどべかどる』解説）教文館
中根 勝（1999）『日本印刷技術史』八木書店
福島邦道（1973）『キリシタン資料と国語研究』笠間書院

原稿受領日—2008年3月16日